

**SUPER
FORMULA
LIGHTS**

HELM
MOTOR SPORTS





HELM MOTORSPORTSが挑むスーパーフォーミュラ・ライツの第2大会 今季初のウェットレースも全戦完走し、チームに多くのデータをもたらす

わずか2週間前に幕を開けた2022年の全日本スーパーフォーミュラ・ライツ選手権(SFライツ)は、早くも鈴鹿サーキットで第2大会を迎える。

今季からこの舞台に挑む「HELM MOTORSPORTS」は、第1戦の6位が最上位という悔しさをかみしめ、鈴鹿サーキットへと入った。

SFライツはレースウィークの木曜日から公式練習が行われる。残念ながらこの日は午後から雨模様で、セッションの中盤からはヘビーウェットのコンディションとなり、平木湧也、平木玲次の2人は約1時間で走行を見合わせることに。

この路面状況でのマシンバランスにはまずまずの手ごたえを感じたため、期待をもって翌日の走行に臨んだ。

ただ、今大会は「鈴鹿2&4」というイベント名のとおり、2輪レースとの併催。金曜日は2輪走行後にセッションが設けられ、これまでとは違う路面状況にまた悩みを抱えながら、土曜日の公式予選を迎えることとなった。

公式予選

4月23日 (土)

天候：晴れ

路面状況：ドライ



Qualifying

公式予選は開幕大会同様に30分間のセッションで行われ、自己ベストタイムで第4戦の、セカンドベストタイムで第5戦のグリッドが決定する。レースウィーク最終の第6戦グリッドは、第4戦の決勝結果に基づいて決められる。

金曜日までの練習走行で、マシンのアンダーステアに悩まされていたHELM MOTORSPORTSの2台。土曜日午前の予選に向けて、チームは2台のマシンを全く違う方向へとセッティングの大変換を施した。

迎えた30分の予選で、まずはセオリー通り、1セット目の新品タイヤを投入して1アタック目に臨む2人。平木玲次はアウトラップにウォームアップラップを続け、計測3周目に1分54秒125をマークした。さらにタイム更新を狙って2周連続のアタックをかけたが、セクター1で0.3秒のビハインドになると、そのままペースを上げることができず1分54秒663にとどま

り、ピットに戻ってくることに。平木湧也は同じく1セット目のタイヤでまず1分54秒711を記録すると、翌周は1分54秒613とタイムを削りピットイン。アタックの感触からセッティングの調整を施すと、2セット目のタイヤを装着してピットを後にする。通常であれば、路面にタイヤのラバーも乗り、セッション後半のアタックは全体的にタイムが更新されていく。平木玲次も1分53秒751と、それまでの自己ベストタイムを約0.4秒縮め、平木湧也も最終ラップで1分54秒433の自己ベストタイムをマークした。しかし、ライバル勢の2セット目でのタイムの更新幅は大きく、2人の順位はほとんど変わらないまま、ベストタイムで決定する第4戦グリッドは平木玲次が9番手、平木湧也が12番手に。第5戦グリッドは、平木玲次は同じく9番手、平木湧也は10番手という結果になった。

QF COMMENTS



62 Driver HIRAKI Yuya

練習走行までの内容や結果から、予選に向けて大きくクルマの方向性を変えてみたのですが、結果としては悪い方向に進んでしまいました。アンダーステアがひどく、ベストは尽くしたもの

の自分の本来の力を出し切れるような状況ではありませんでした。決勝で同じ流れになってしまわないよう、断ち切る策を考えます。



63 Driver HIRAKI Reiji

ライバル勢のアタックラップと比べてみても、どこかのセクターが特に後れを取っているということではなく、全体的に差をつけられているような感じです。低速コーナーも高速コーナーもアンダーステアで曲がら

ないという症状は変わらず、そうすると全体的にタイムが落ちてしまう。セッティングを変更しても、その反応がほとんどない状態なので、その根本を解決しないといけないと感じています。

Rd1 決勝レース
4月23日 (土)
天候：晴れ
路面状況：ドライ



Race 1

公式予選から約4時間半のインターバルを経て、第4戦決勝レースがスタートした。午前中は青空が見えていた鈴鹿サーキットの上空も、夕方になり雲がかかってくるように。平木玲次は5列目の9番グリッドに着き、その横にはマスタークラスの1台が並ぶ。12番グリッドの平木湧也は6列目のイン側だ。シグナルのブラックアウトで一斉にスタートしていく中、平木玲次はスタートの動き出しこそ良かったものの、加速でわずかに鈍ったところを1台にかわされ、10番手にドロップしてしまう。オープニングラップの130Rではアウト側から並びかけポジションを取り戻そうとする平木玲次。その勢いで2周目には9番手に復帰し、さらに前を追いかけていった。しかし、上位陣のペースは1分53秒台で推移、8番手のマシンも1分54秒台の中盤から後半のタイムで周回を重ねていく中、平木玲次は4周目に記録した1分55秒455がベストタイムで、ペースに大きな差を抱えてしまっていた。

実は、予選までの内容から再び大きなセット変更を施して決勝に臨んでいた平木玲次だったが、結果的に症状はさらに悪化。“曲がらないクルマ”に悪戦苦闘しながらも、なんとかチェッカーフラッグを目指して周回を重ねていた。

一方の平木湧也も、スタートで順位を落としていたが、2周目に入る1コーナーで1台をオーバーテイク。3周目にもう1台、そして5周目の1コーナーでさらに1台をかわし、レース中盤までで10番手までポジションアップしていた。この時点で2台のギャップは約3秒。ここから後半にかけては平木湧也の方がペースが勝り、じわりじわりとギャップを削ってくる。11周目を終えた時点では0約0.9秒差まで迫り、ファイナルラップでさらに接近。ただし順位を入れ替えるには至らず、0.2秒差で平木玲次が先にチェッカーを受けた。

Rd2 決勝レース
4月23日（日）
天候：雨
路面状況：ウェット

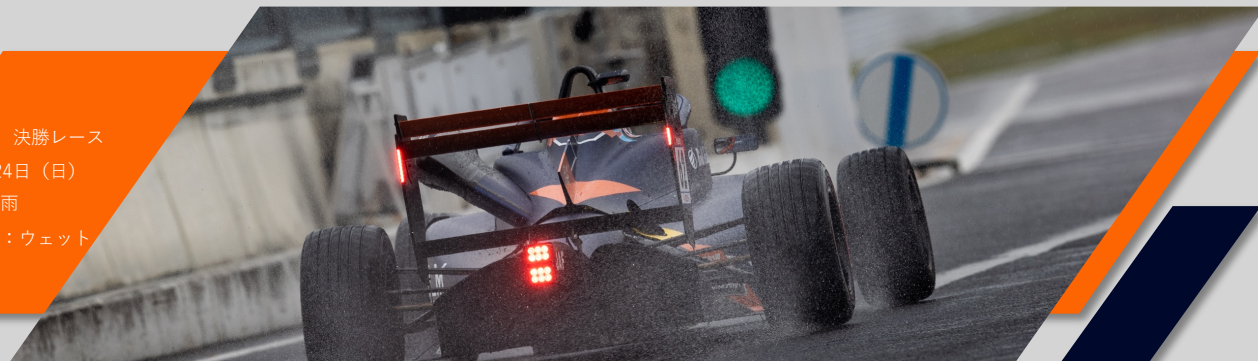


Race 2

レースウィークの木曜日以来となったウェットコンディション。そして、今季初のウェットレースとなった第5戦は、平木玲次が9番グリッド、平木湧也が10番グリッドからのスタートだ。濡れた路面でのこのカテゴリーでのスタート経験は初めて。2台は周りに比べてわずかに出遅れてしまい、マスタークラスの1台にかわされてしまうが、平木玲次はすぐさま逆バンクでポジションを取り戻し、平木湧也は一つポジションを下げた11番手でオープニングラップを終えた。ここからは、前走の車両が巻き上げるウォータースクリーンと路面状況との格闘が続く。後続では路面の濡れ具合で足元をすくわれスピンを喫する車両もある中、このレースでもまたアンダーステアに悩まされる2台はそれでもなんとか

コース上に踏みとどまり、周回を重ねていった。そして6周目、8番手を走行する車両がデグナーでコースオフし、グラベルでストップ。車両回収のためにセーフティカーが導入された。8周目にリスタートが切られると、各車は接近状態のまま1コーナーへ。平木湧也も1コーナーでの逆転を狙うが、ここでは並びかけるに至らず。相手に対してセクター1での速さには分があるものの、やはり水煙の中では決定的なチャンスをつかむことができない。そのまま12週のレースが終わり、平木玲次はスターティンググリッドから1ポジションアップの8位、平木湧也は10位でのフィニッシュとなった。

Rd3 決勝レース
4月24日（日）
天候：雨
路面状況：ウェット



Race 3

このレースウィーク最後のレースとなったのが、SFライツの第6戦。前の2戦よりも5周長い17周で争われた。第4戦の決勝結果に基づき、平木玲次が9番グリッドから、平木湧也が10番グリッドからのスタートだ。一度は小康状態になっていた雨脚も再び強まってくる中、ウェットコンディションでの今季2度目のスタートが切られた。2台とも今度はまずまずの蹴り出しを見せ、第5戦では「1コーナーに入る直前、イン側に寄って来た車両があって行き場をなくしてしまっ」とポジションを下げた平木湧也も今回はポジションキープでオープニングラップを終える。ここからは追い上げの展開を期待したが、2分13~14秒台のタイムを並べる上位陣に対し、平木湧也は2分15秒台が精いっぱい。ガソリン搭載量が減って軽くなってきたレース後半ようやく1分14秒台に入ると、最終ラップに2分14秒298のベストラップを記録。

終始、前を行く平木玲次に差をつけられてしまう状況にやり場のない気持ちを抑えながら、17週のレースを10位で走り切った。

平木玲次の方はというと、午前のレースを終えたところからこの最終レースに向けて、再び大幅なセッティング変更を施して臨むも、課題のアンダーステアはやはり解消されない。オープニングラップから数周でつけられてしまった差を逆転することはかなわなかったが、最後までプッシュの手を緩めることなく、最終ラップで2分13秒632をマークしてチェッカーを受けた。

第2戦でポイントゲットを果たした第1大会に比べ、非常に悔しい結果となった第2大会。ドライバーの2人は大きな課題に直面し続けたレースウィークとなったが、それでも3レースを無事に、最後までマシンを走らせたことで得られたデータも多い。1年目のチームにとって貴重な財産となるデータ収穫を果たし、次戦オートポリス大会へ挑む。

Race COMMENTS



62 Driver HIRAKI Yuya

今回は終始、マシンのバランスに悩まされたレースウィークとなりました。もちろん、僕たちにとっての新しいチャレンジで最初からうまくいくとは思っていませんし、SFライツが簡単なカテゴリーでないことも分かっています。ステップアップしていけばいくほど練習できる機会も減っていく、ただ車両のセッティングでいろんな箇所の組み合わせは膨大で、公式セッションの中で2台がバラバラなことを試して、いいものと悪いものを見極めていっていますが、今回に関しては全くいいところが見つからないまま終わってしまい

ました。それでも、2台がどのセッションもきちんと走り切ったことで得られたデータのなかに、何かヒントがあるかもしれないですし、今の時点では全くつながっていないデータでも、ここから先どんどん蓄積していけばつながりが見つかり、方向性が定まってくると信じています。チームのみんな過酷なことをやっていますが、“何とか老舗のチームに食い込んでやる”という思いは同じです。みんなのためにも、今できること、やらなければいけないことをしっかりと務め上げていきたいと思います。



63 Driver HIRAKI Reiji

ドライコンディションでも、ウェットコンディションでもグリップ不足に悩み、アンダーステアが強い状況は変わりませんでした。開幕大会と比べてもさらにいろいろなことを試したものの、クルマ側の変化が思ったほどになく、自分たちが考えているよりも、もっと根本的なところで違っているのかもしれない

せん。二度とこんなレースはしたくないと思ってしまうような週末になりましたが、そんな中でも2人が走り切って、データを集めることができたのはポジティブなことだと考えています。今回得られたものをもとに、クルマの改善をチームみんなで頑張っていきたいと思います。

NEXT Race

シリーズ第3戦は、オートポリスにて5月21~22日に行われます。

引き続き応援よろしくお祈いします。

